

系統法の研究

太田 隆
文芸経済研究所

人類の思考の大きな枠組みには、演繹法・帰納法があり、さらにこれを補強するものとしてアブダクションがある。私の述べる系統法は、これらすべてを包含し得る考えであり、アリストテレスの言う類推に近い。

探偵小説のシャーロック・ホームズの方法は全てを網羅するというものである。

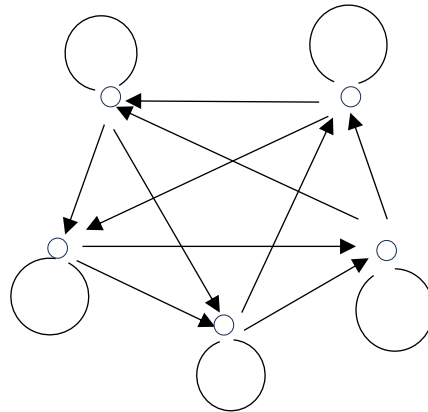


図1 系統法

すべての可能性を列挙し、相互の関連を挙げ、全ての項の関連を手繰るのが系統法であり、ホームズの言「精神を集中して、あらゆる証拠を考慮し、とるべき説をいくつも組み立て、それらを比較検討し、そしてどれこれの点が本質的でどれこれの点が皮相のものであるかを決定する」「いくつか説明が生まれたら、一つ一つ検討を加えて、最も信ずべき支持のものを選び出す」「理想的な推理家というものは、さまざまな意味をふくむ一つの事実を示されると、そこにいたるまでの一連の出来事をことごとく推察するだけでなく、さらにまたその事実から発展してゆく将来の結末もみな見とおせるものだ」「探偵の技術においては、数多くの事実の中で、どれが偶然のもので、どれが必然のものかを見きわめるのが、最も重要です」(『シャーロック・ホームズ事典』)ということに見る如く、ホームズはロンドンの街並みを頭の中に叩き込み、思い浮かぶ関連のある全てのことを脳中に描いて順序立てて推理する。系統法の広い例のうちでは、捨てるもよい項目も考えることができる。その場合には、帰納法は出来るだけの枚挙になるから、系統法は思い出せるだけとしたら異なることになる。系統法は考えのルートを辿ることが重要で、単に経験則を探ることではないから、これまでのことから全体的にどういうことが言えるのかが重要である。

図で言うと要素間の空間的考えをすると、順序立てて進める演繹法を含む。要素についての流れの枚挙的・時間的考えをすると帰納法になる。系統法の構図におけるアイデアの初期の動因を考えるとアブダクションになる。

系統法はネットワーク思考である。ネットワーク思考はインターネットや、神経経済学など、工学・経済学でも発展している分野である。系統法の起源は、ギリシャ・ローマのトポスの思考であり、仏教の縁起の思考である。系統法は全体論であり、要素還元的でもある。

ネットワークで自他の倫理を簡単な系統法の基体で言うと、デカルトの「コギト・エルゴ・スム」は他者を全て疑い自分と自分へのエッジの思考の存在だけを信じたので、一番狭い。カントは「他者を手段としてのみならず目的としても扱え」ということで他者へのエッジ（手段）のみならず他者の自己へのエッジ（目的）も尊重する。これは次のヘーゲルより広い。ヘーゲルの「主人と奴隷の弁証法」は、自己が他者に依存し、他者が自己に依存するから共倒れになる（マルクスのブルジョアとプロレタリアートも同じことである。プロレタリアートが支配すれば消費をしてブルジョアに再び権力を奪われる）。西田幾多郎の「私と汝」では「私は汝を認めることによって私であり、汝は私を認めることによって汝である」人格的關係で、カントの道德の法則を認めつつ、自己の立場も、お互いも認め合うから全部の中で一番広い。ゲーム理論的視野も持ち、一即多、多即一を含意するからこれより広い立場は絶対がない。以上は倫理的課題である。

ベルグソンが時間・空間について「時間は諸要素が相互に浸透し合う。空間は構成部分が相互に隣接し合う」という『時間と自由』の考えに近い。ヴィトゲンシュタインは、論理自体は軌道が目に見えないもの、論理は要素と同じレベルではないこと（世界記述の仮言性と言われる）ということを行ったが、系統法のエッジはそういう性質を持っている。図1のネットワークを基本としてネットワークの原基のようなものが考えられよう。

系統法は思考上のものなので、継起することの時間の順序が変わっても構わない。時間は全体を含むが空間は隣接し相互に排除する。そういう時間と空間の性質が系統法で捉えられる。系統法を元として人間の概念における時間・空間を組み直すことが出来よう。マクタガードではC系列の時間である。系統法はケインズの『確率論』の、命題間の関係ということで確率概念でも使い得る。各ノットを人、または人の発する命題と措定し命題間（のエッジ）を各人間、個人の過去・現在・未来の対話関係とし、命題のステートメントではなく、対話論理といったものや、科学の命題間の関係を言うパラダイムの問題を叙述しようとされる。命題を全て説明しうるのがパラダイムとして成立する系統法である。科学哲学については、パラダイムは「広く人々に受け入れられている業績で、一定の期間に科学者に自然に対する問い方と答え方のモデルを与える」と定義されるが、前半は空間的、後半は時間的な系統法の継起を語っている。系統法が一巡し通常科学が終れば科学革命が起りパラダイムは更新される。批判的合理主義については、「科学は合理的な検証の提起とその反証（批判）を通じて試行錯誤的に成長する」ということで、批判のノットをエッジが巡ることで批判を乗り越えていく。系統法は科学的リサーチプログラミングの方法とそう違わない。一般に哲学・思想はネットワークで表現できる部分があり、系統法は人間の思考法を扱うものだから、現在具体性はなくとも、AIの原理の叙述にも使えるものと思われる。系統法はライプニッツのモナドを時間の形式で統合したものと言える。